

審査の結果の要旨

氏名 藤原 江美子

ボルネオ島では、1970年以降、国家の開発政策や移住政策が先住民ダヤック社会に土地所有権をめぐる葛藤をもたらしてきた。とくに地方分権化・民主化以降、アダット（慣習）復興とともに人々の土地所有権に対する権利追求の動きが高まり、軋轢が多く見られるようになった。こうした地域社会の変容は、アダットリーダーによるコミュニティ外部への対応の実態とともに先行研究で検討されてきた。東南アジア農村社会研究のリーダー論一般では、リーダーによる開発利益の調整はコミュニティ内部の社会関係や社会構造を踏まえて検討する必要があると指摘されてきたが、アダットリーダー論ではこのことが十分に検討されてこなかった。

本論文はこのような問題意識に基づいて、アブラヤシ農園開発の到来により引き起こされた先住者（ムダン人）と企業・自発的移住者たちとの土地紛争に対して、リーダーがコミュニティ内外の双方においてとった対応、すなわちアダット長と長老たちの合議という複数のリーダーシップの発現を想定した紛争処理の対応を民族誌的に描き分析したものである（1章）。

そのための調査として、1年半の長期滞在を含む10年間にわたる参与観察とオープンエンドインタビュー調査といった質的調査、および半構造化インタビュー調査（84世帯への集落悉皆調査）、質問紙調査（194世帯）といった量的調査を併用している。これにより、トライアングレーションを意識したより妥当性の高い情報収集を可能としている（2章）。

調査結果は次のように整理されている。（1）外部に対するリーダーシップ（3章）：ムダン人は、これまで自発的移住者を積極的に慣習地に受け入れてきたが、土地所有権の問題から一部の移住者たちを「侵入者」とみなし、その排除を求めていたこと、しかし土地利用方法の違いや移住者らのアダットへの

不理解、土地所有権の正当性の競合などにより、リーダーたちが事態に対してうまく対応できておらず、侵入者との軋轢が解消しないままであったこと、そしてそのためこれまで反対していたアブラヤシ農園開発企業を慣習地に受け入れることを移住者排除の根拠にしようとする住民も現れるに至ったことが描かれている。(2) 外部に対するリーダーシップ (4章) : ムダン人のアブラヤシ農園開発企業を排除する具体的な対策としてコミュニティ林制度への登録活動を NGO アクターとの協働で実施したプロセスから、地域社会が求める土地利用権の法的認知が困難であること、およびリーダーたちが NGO に依存している状況が明らかにされている。(3) 内部におけるリーダーシップ (5章) : 上記の外部への対応の結果、コミュニティ内部に生じた軋轢の実態を、コミュニティで初めてのアダット長の直接選挙が実施された経緯、およびその後の新アダット長と土地紛争処理の進捗具合に着目して明らかにしている。

以上の調査結果に基づき、次のような考察・結論 (6・7章) を導いている。まず、ムダン人コミュニティの身分制にもとづく慣習的リーダーたちのリーダーシップは、多民族地域社会の中において、またアブラヤシ農園開発企業との土地紛争という外部への対応において脆弱であり、またコミュニティ内部の軋轢解消に対しても脆弱であることが示されている。そして、このような現状に不満を持つ人々が選挙によるリーダー (アダット長) の交代を望み選挙が実施されたが、結局は世襲的なアダット長が選ばれ、その地位の慣習的権威は保持されることになった現象に対して、個人の資質よりも複数のリーダーシップを調整し成果を出す能力が多くのコミュニティメンバーに期待されたからであるという解釈がなされている。

本論文は、コミュニティ外部のみならず内部でのリーダーシップの実態を検討することで、リーダーシップを発揮する側と追従する側の期待や評価という双方向の働きかけによって成り立つリーダーシップ概念の相互性を明らかにすることに成功している。これらの研究成果は、学術上応用上寄与するところが少なくない。よって、審査委員一同は本論文が博士 (農学) の学位論文として価値あるものと認めた。